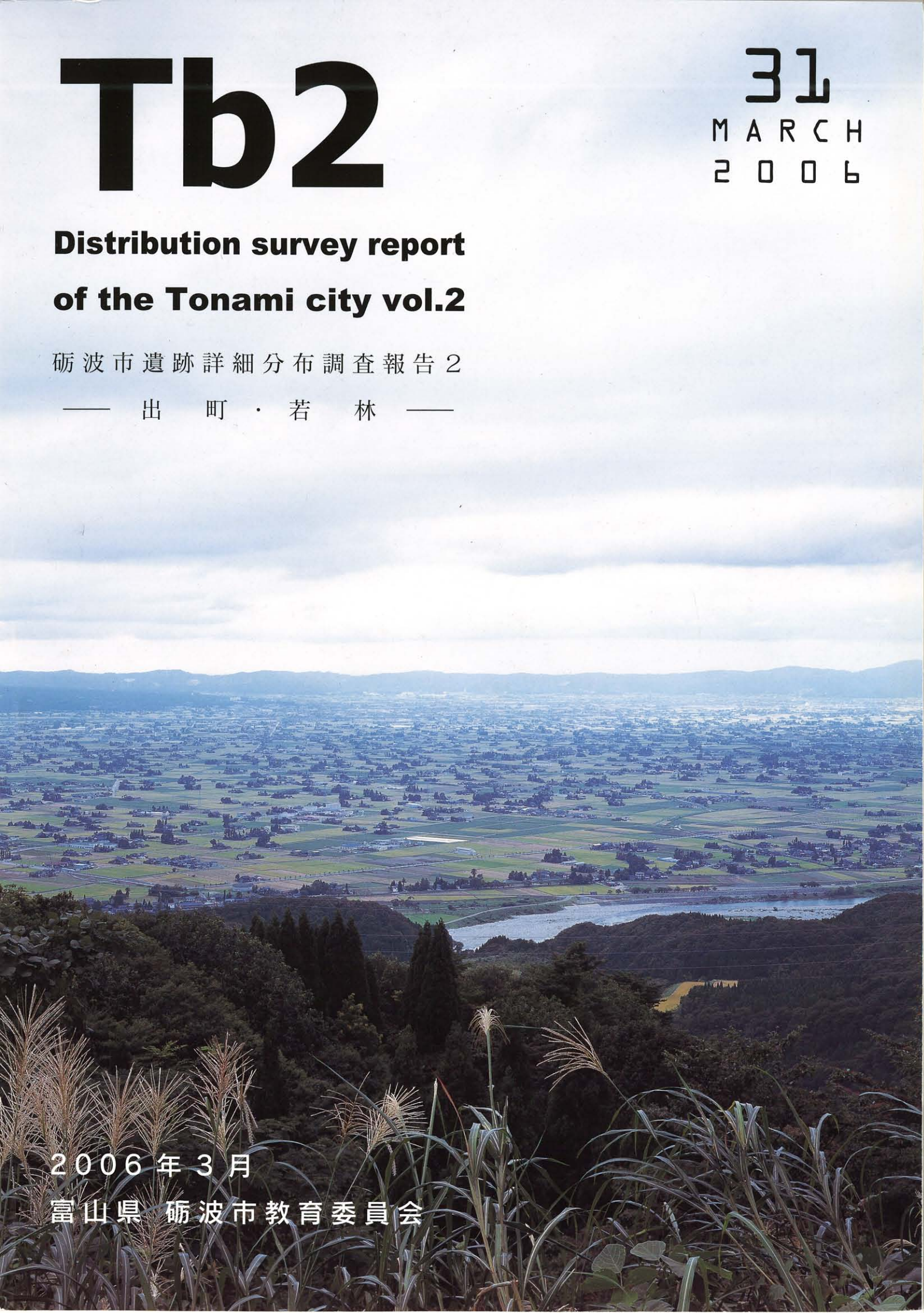
Tb2

31
MARCH
2006

Distribution survey report of the Tonami city vol.2

砺波市遺跡詳細分布調査報告2

―― 出　町・若　林 ――



2006年3月

富山県 砺波市教育委員会

序

砺波市は、富山県西部の砺波平野のほぼ中央部、大部分が庄川により形成された扇状地上に位置しています。将来の都市像を「庄川と散居に広がる健康フラワー都市」とし、まちづくりの基本理念を「花香り、水清く、風さわやかなまち　砺波」と定め、文化遺産である散村の保護・活用を図るとともに花・水・風をキーワードに自然との調和をもとめ、住民が安心して暮らせる住みよい都市をめざしています。

砺波市では、これまでに旧砺波市域全体を対象とした遺跡詳細分布調査は実施されておらず、平野部の大半が遺跡の希薄な地帯という印象を与えます。これまで偶発的な発見や地域的に特定種別の遺跡の表面調査はなされてきましたが、少ない情報をもとに地域の歴史的環境を語ることはできません。

また、砺波市は近年人口増加とともに開発行為が頻発しており、埋蔵文化財保護の必要性が日々強くなっております。現状のままでは埋蔵文化財行政を運営する上で弊害となりかねません。

旧庄川町では、すでに平成１４年度から２ヵ年をかけて町内遺跡詳細分布調査が実施され、報告書が刊行されています。

そこで、国庫補助事業として７ヵ年計画で旧砺波市全域を対象とした遺跡詳細分布調査を実施する運びとなりました。

本分布調査の成果をまとめた本書が砺波市の地域史研究ならびに埋蔵文化財保護体制確立の一助となることを願ってやみません。

おわりに、調査の実施および報告書刊行にあたり、出町・若林地区各自治振興会および砺波市土地改良区、富山県埋蔵文化財センター、富山大学考古学研究室をはじめ関係各位に多大なるご援助・ご協力をいただきました。衷心より感謝申し上げます。

平成１８年３月

砺波市教育委員会
教育長　堀田良男

例　言

1．本書は、砺波市教育委員会が国庫補助を受けて７ヵ年計画で実施している市内遺跡詳細分布調査事業の２年目（2005 年度）の分布調査報告である。

2．調査は、富山大学考古学研究室の協力を得て、砺波市教育委員会が主体となり実施した。

3．今年度調査は、砺波市出町・若林地区を対象とした。調査期間は次のとおりである。

　現地調査　平成 17 年（2005）4 月 13 日～平成 17 年 5 月 27 日

　整理作業　平成 17 年（2005）10 月 1 日～平成 17 年 3 月 31 日

4．調査事務局は、砺波市教育委員会 生涯学習課に置き、学芸員野原大輔が調査事務を担当し、教育次長小幡和日出が総括した。

調査事務局	砺波市教育委員会	教育次長	小幡 和日出
	生涯学習課	課　長	清澤 康夫（係長兼務）
調査担当者	同	学芸員	野原 大輔

5．現地調査にあたって、出町・若林地区の各自治振興会に多大なご協力・ご理解を得た。また、基盤整備前の図面（従前図）の使用にあたって砺波市土地改良区のご協力・ご指導を得た。記して謝意を申し上げる。

6．現地調査員は、主に富山大学考古学研究室のご協力を得た。調査参加者は、下記のとおりである。（五十音順・敬称略）

　福沢佳典、間野 達（人文学部人文科学研究科文化構造研究専攻）

　赤座裕子、東　良朗、伊藤剛士、遠藤司洋、岡島怜子、北村志織、黒木　甫、小林高太、小松彩乃

　佐藤浩志、高田博文、高橋彰則、竹中庸介、竹谷充生、栃堀哲彦、水谷圭吾、村上しおり、山本教幸

　吉田有里、用田聖実（以上、人文学部国際文化学科）、久保浩一郎（富山市教育委員会）

7．資料の整理、本書の編集・執筆は、調査担当者が行なった。また、遺物整理・図面作成には、横川美雪・千田友子（生涯学習課）が参加した。

8．採集遺物および記録資料は、砺波市教育委員会が保管している。

9．現地調査および本書の作成に際して下記の諸氏・関係機関からご指導・ご協力を得た。記して謝意を表する。

　岡本淳一郎（財団法人富山県文化振興財団）　神保孝造（財団法人富山県文化振興財団）

　高梨清志（富山県教育委員会）　宮田進一（財団法人富山県文化振興財団）

以上、五十音順・敬称略

目　次

序　文
例　言
目　次

第１章　調査の沿革　1

1　地理的環境と遺跡の分布　1
2　調査に至る経緯　4
3　分布調査の年度計画　4
4　分布調査の方法　5

第２章　調査の成果　11

1　平成１７年度調査区の概要　11
2　採集遺物　15
3　遺跡各説　17

神島遺跡
狐島遺跡
西中遺跡
西中中島遺跡
下中万部島遺跡

第３章　まとめ　19

【参考文献】

表 目 次

Tab.1　地形分類と遺跡割合
Tab.2　遺跡数の推移
Tab.3　分布調査の年次計画
Tab.4　採集遺物一覧
Tab.5　調査遺跡一覧

図版目次

Fig.1　砺波平野の地形分類図
Fig.2　埋蔵文化財包蔵地と地形分類図
Fig.3　玦状耳飾
Fig.4　踏査経路模式図
Fig.5　砺波市分布調査範囲図
Fig.6　調査区の字界・字名図
Fig.7　調査区周辺の旧版地図
Fig.8　従前平面図（出町）と遺跡の位置
Fig.9　従前平面図（若林）と遺跡の位置
Fig.10　採集遺物の時期別点数
Fig.11　遺物実測図
Fig.12　埋蔵文化財包蔵地と遺物採取地点

写真図版目次

PL.1　空中写真（1）
PL.2　空中写真（2）
PL.3　調査写真（1）
PL.4　遺物写真（1）
PL.5　遺物写真（2）
PL.6　遺物写真（3）

第１章　調査の沿革

１　地理的環境と遺跡の分布

庄川扇状地　砺波市は大部分が東部を北流する庄川により形成された扇状地であり、東に旧扇状地右扇の芹谷野段丘、そして射水丘陵から連なる東別所新山山地を控える。庄川扇状地は県内の三大扇状地に数えられ、そのなかでも最大の規模を誇り、面積は 146 ｋ㎡に及ぶ。庄川扇状地には、地理学上著名な散村（Dispersed Settlement）が広がっており、長閑な田園空間を形成している。

庄川はかつて幾度となく河川変遷を繰り返し、近世に至り現河道に落ち着いた経緯がある。天正 13 年（1585）の大地震によって、庄川町雄神橋付近の弁財天社辺りで千保川・中田川に分流された。現在の庄川が主流になるのは、近世初頭の承応年間（1652 ～ 1655）頃の柳瀬普請、続く寛文 10 年（1670）にはじまる上流の松川除築堤工事を経てのことである。

氾濫原であった平野部は、旧河道が幾条も通り、地形の小起伏が多い。そのため遺跡の希薄な地帯として知られ、遺跡全体の 30％に過ぎない。縄文遺跡の分布は、扇頂部に中期中葉の拠点集落・松原遺跡があるが、段丘裾の東保石坂遺跡、徳万遺跡、扇央部の久泉遺跡などが散在する状況である。

弥生・古墳時代は社会基盤が稲作に移行し、生活圏が湧水帯に移動したため、集落は未発見である。わずかに平野東部の低位段丘上にある安川野武士Ａ遺跡で弥生土器が採集されている。

東大寺領荘園　奈良時代になると８世紀中頃に東大寺領荘園が成立し、平野東部を中心に扇央部まで遺跡の分布域が拡大する。荘園本拠に近い久泉遺跡、秋元窪田島遺跡、徳万頼成遺跡、扇央部には小杉遺跡、千代遺跡、高道向島遺跡、宮村遺跡などが展開し、いずれの遺跡も地理学上でいう”マッド”（mud）上に存在する。マッドは微高地・自然堤防上に発達した黒色有機質土の堆積域であり、河川氾濫の影響の少ない比較的安定した地形といえる。

般若野荘　中世になると東大寺領荘園の範囲を踏襲して徳大寺家領般若野荘が成立（12 世紀中頃か）し、扇央部には油田条（村）が文献にみえる。般若野荘では領家方の支配領域と目される位置に東保遺跡（東保高池遺跡）、東保般若堂遺跡があり、周辺に秋元窪田島遺跡、久泉遺跡などがある。

芹谷野段丘
和田川段丘帯　庄川の右岸には台地がひろがり、河川作用によって形成された河成（河岸）段丘が存在している。それらは低位段丘、中位段丘、高位段丘として分類することができる。庄川町庄から宮森までには低位段丘が存在しており、隆起扇状

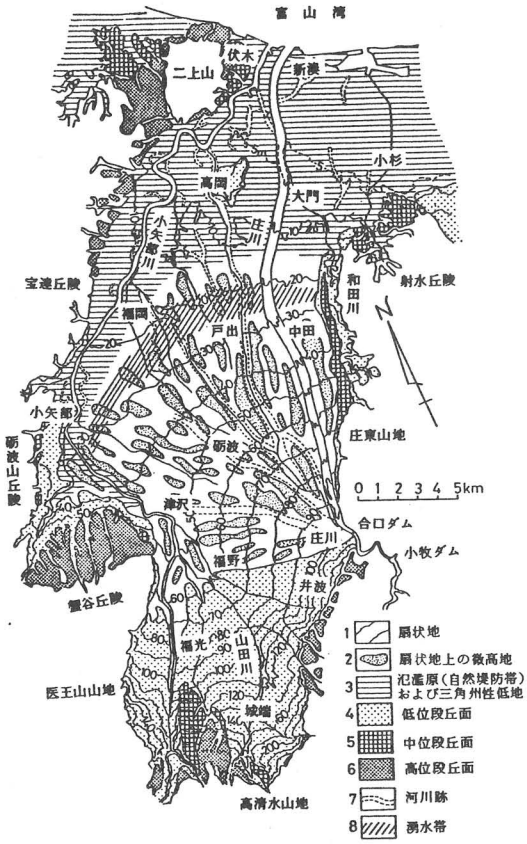


Fig.1　砺波平野の地形分類図　（神島利夫 1982）

地堆積物が形成されている。高位段丘にあたる芹谷野段丘（福岡段丘）は、旧扇状地の右扇の一部が残存し段丘となったものである。南は安川付近から北は大門町串田付近まで約 10km に広がり、福岡の厳照寺周辺では海抜 80m を測る。芹谷野段丘上は、近世に庄川から芹谷野用水が引かれ、集落が展開した。

厳照寺遺跡　段丘縁辺部から丘陵裾にかけて縄文期の遺跡が多く、厳照寺遺跡、高沢島Ⅰ遺跡、高沢島Ⅱ遺跡、宮森新北島Ⅰ遺跡、上和田遺跡などが存在する。厳照寺遺跡は梅檀野築圃場整備事業に先立ち昭和 50・51 年に富山県によって調査が実施されている。竪穴住居跡 11 棟、埋甕 1 箇所、穴などが検出され、中期前葉の典型的な弧状集落であることが判明した。出土土器群は、「厳照寺Ⅰ式・Ⅱ式・Ⅲ式」として中期前葉の地域的な編年を確立した。

弥生時代は増山城跡で土器片が発見されており、古墳時代は高沢島Ⅲ遺跡で遺物包含層中から土師器を数点検出している。

梅檀野窯群　奈良時代になると東大寺領荘園に近接することから、須恵器の一大生産地となる。段丘・丘陵一帯にある須恵器窯を総じて梅檀野窯跡群と呼び、南北約 2.0km の範囲に窯が点在し、南の福山支群・北の増山支群に分けられる。増山支群の宮森窯と福山支群の安川天皇窯が最も古く 8 世紀第 2 四半期から中葉に位置付けられ、8 世紀第 3 四半期から第 4 四半期にかけて増山支群の増山亀田窯、増山団子地窯、増山妙覚寺坂窯が操業を始め、同時期には福山支群で福山窯、福山小堤窯、福山大堤窯が操業している。9 世紀前半に入ると、小丸山 1 号窯・2 号窯が操業され、9 世紀後半から 10 世紀にかけて正権寺後島窯、増山外貝喰山窯、増山笹山窯、東笹鎌野鎌が操業をし、以後梅檀野窯跡群では須恵器生産が衰退する。

庄東山地　芹谷野段丘の東、和田川の両岸には中位段丘が形成されており、和田川流域段丘帯をなしている。和田川は、牛岳の北西側山中に源を発し、庄東山地と芹谷野段丘の間を大きく蛇行し、池原付近で坪野川が合流する。流路延長 23.5km、庄川の支流である。昭和 43 年、和田川総合開発事業により和田川ダムが竣工、和田川は堰き止められて増山湖ができた。

和田川の右岸は、一般に庄東山地（音川山地）と呼称される範囲に含むことができ、富山県を東西に分断する射水丘陵帯の一枝群を成している。この山地は起伏量が少ない丘陵性小起伏山地であり、地質的には青井谷シルト質泥岩層の範囲に含まれる。南に位置する山地は標高 200m 余りを最高点として 100m 余りの小起伏山地で構成されている。この山地の西北に位置する天狗山（標高 192m）の北斜面、県民公園頼成の森の緩斜面丘陵は、南側山地からのかつての扇状地性堆積層で構成されている。表層地質としては、砂岩を主体とする下部と無層理青灰色泥岩を主体とする上部から成っている。

増山城跡　和田川右岸の丘陵上には、越中三大山城のひとつに数えられる増山城跡がある。南北朝時代の二宮円阿軍忠状に「和田城」という城名がみえ、亀山城に比定する見方がある。室町時代から放生津城を本拠とする神保氏の支城となり、天正 4 年（1576）に上杉謙信に攻略され落城し、天正 9 年（1581）に織田方に焼き払われた。天正 11 年（1583）以降、越中統一を果した佐々成政の西の拠点となり、のちに前田方の手に渡り、城の守将となった中川光重が退老もしくは没した慶長年間まで存続したとされる。また、左岸には城下にあたる増山遺跡（増山城下町遺跡）が広がっている。

Fig.2　埋蔵文化財包蔵地と地形分類図　(Scale=1／75,000)

2　調査に至る経緯

沿　　革　遺跡地図は、埋蔵文化財の保護・周知化を目的として、これまで作成されてきた。砺波市内の遺跡は、1974年発行の『全国遺跡地図　富山県』ではわずか34遺跡しか確認されていないが、1993年に富山県埋蔵文化財センター発行の『富山県埋蔵文化財包蔵地地図』では112遺跡に急増している。昭和40年代からの高度経済成長に伴う開発増加、そして全国的な埋蔵文化財保護の気運高揚に起因する。その後『富山県埋蔵文化財包蔵地地図』を基に加除修正を行っており、現在まで159遺跡を確認している。インターネットを核とする情報化社会への移行に伴い、富山県では平成16年度に「富山県GISサイト」(http://wwwgis.pref.toyama.jp)を開設し、最新の埋蔵文化財包蔵地図を広く県民へ周知すべく環境を整えた。

これまで旧砺波市では、旧市内全域を対象とした遺跡詳細分布調査が行われておらず、土木工事による偶発的な発見や市民からの届出、国道敷設等の大規模事業に伴う分布調査等により埋蔵文化財包蔵地の把握に努めてきた。このようにして設定された範囲は決して精度の高いものとは言えず、開発照会がある度に事業用地を踏査してきた。開発行為等の事前協議を進める上で精度の高い遺跡地図は必要不可欠であり、埋蔵文化財の保護・活用の観点からも遺跡地図の充実は急務である。また遺跡の分布状況は、考古学研究の基礎資料である。以上の事由から、遺跡詳細分布調査を実施する運びとなった。

Tab.2　遺跡数の推移

遺跡数			発行機関	発行年	図　名
砺波市	旧砺波市	旧庄川町			
30	24	6	文化財保護委員会	1965	『全国遺跡地図（富山県）』
35	29	6	富山県教育委員会	1972	『富山県遺跡地図』
34	29	5	文化庁文化財保護部	1974	『全国遺跡地図　富山県』
112	98	14	富山県埋蔵文化財センター	1993	『富山県埋蔵文化財包蔵地地図』
159	129	30	※平成17年4月1日現在		

旧庄川町の分布調査　旧庄川町では国庫補助を受け、合併前の平成14～16年度の3ヵ年で町内遺跡詳細分布調査を実施している[1]（現地調査2年、報告書1年）。町内を4地域に分割し、開発が予想される平野部に重点を置き調査が行われ、13遺跡の新規発見と2遺跡の台帳内容変更がなされた。採集遺物は463点を数え、約半数が庄川左岸の段丘上に分布することを把握している。

著名な金屋ポンポン野遺跡付近で縄文時代前期後葉・蜆ヶ森Ⅱ式期の玦状耳飾（蛇紋岩製）を1点採集している。

1　庄川町教育委員会　2004『富山県庄川町埋蔵文化財分布調査報告』

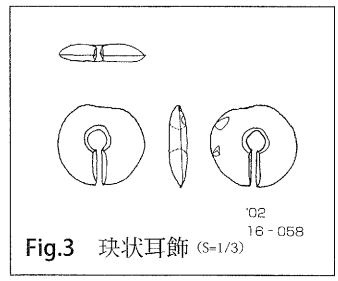


Fig.3　玦状耳飾 (S=1/3)

3　分布調査の計画

旧庄川町域を除く市内全域（96.33km^2）を対象として、現地踏査を7ヵ年計画で実施する予定である（右表参照）。旧砺波市には、計17地区あり、踏査可能面積を考慮し各年度2～3地区ごとに調査を実施することにした。調査地区の設定は、開発行為が多く、埋蔵文化財包蔵地が希薄な地区を先行し、旧砺波市域の南西から北西部、中央部を縦断し庄川を越えて東部、段丘上・山間部という計画を策定した。

Tab.3　分布調査の年次計画

調査年度	年次	調査地区	面積（km^2）
平成 16 年度（2004）	1 年次	鷹栖、東野尻、五鹿屋	14.43
平成 17 年度（2005）	2 年次	出町、若林	9.26
平成 18 年度（2006）	3 年次	林、高波	10.88
平成 19 年度（2007）	4 年次	庄下、油田、南般若	11.08
平成 20 年度（2008）	5 年次	柳瀬、太田、中野	13.22
平成 21 年度（2009）	6 年次	般若、東般若	13.53
平成 22 年度（2010）	7 年次	栴檀野、栴檀山	23.91
			96.33

4　分布調査の方法

踏査の方法　考古学的調査として、地表面の踏査を行い遺物採集に努め、遺構・遺物の広がりや分布状況を把握する手がかりとした。砺波市の平野部は大部分が庄川扇状地によって形成され、大小河川の氾濫が現在の地形状況を生んでおり、古代以前の遺跡立地に大きく反映するという特性がある。遺跡分布と地形状況は表裏一体の関係にあるといっても過言ではない。しかし、旧砺波市では昭和 30 年代後半から県内に先駆けて大規模な圃場整備が行われており、本年度調査区もすでに整備完工されている。かつての景観は失われ、本来の地形的微起伏を確認することはできない。同時に多くの遺跡も保存されることなく破壊された可能性が高い。

そこで、近年の地形改変とこれまでの踏査経験から、遺物の表面採集自体が困難と予想されるため、「なるべく多くの目で多くの遺物を採集すること」と調査の迅速化を目的として、富山大学考古学研究室の院生・学生の協力を得て、下の模式図のように踏査経路をとることにした。扇状地上の圃場整備後の水田は、大型機械導入のため 1 区画 30 a（短辺 30 ～ 40 m × 長辺 100m）の規格を持ち、水廻り効率から短辺が磁北（流路方向）もしくは南東→北西に設定されている。1 班 5 名の体制で 1 区画の踏査にあたり、横並びに短辺方向に沿って歩くことを基本とした。水田畦畔には積年の耕作の結果、遺物が集在する可能性が高いことから、各調査員はできる限り畦畔を踏査経路に組み入れることに努めた。

遺物の扱い　採集遺物は番号を振り、洗浄・注記・接合・実測作業を行った。注記表現は、「砺波市分布調査 2 年次（Tonamishi-Bunputyosa 2）」から、「ＴＢ - ２」とした。現地踏査では、携帯が簡便なゼンリン住宅地図 2000（株式会社ゼンリン北陸）にその場でプロットし、踏査後に砺波市都市計画図（1/2500）に写した。遺物は、班ごとに番号を振り、全体の踏査完了後、すべての遺物に通し番号を付した。大半の遺物が細片であるため、実測可能な個体を選別して図化している。

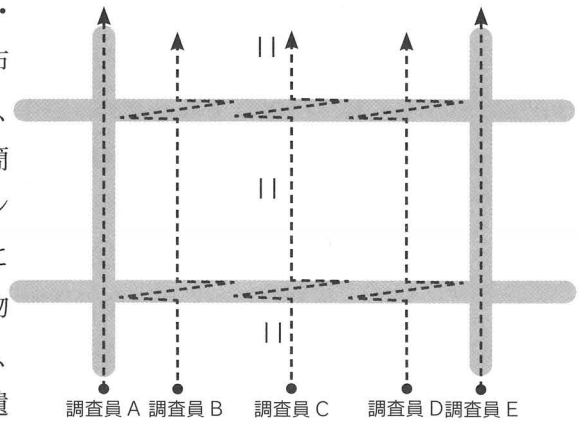


Fig.4　踏査経路模式図

包蔵地の認定

埋蔵文化財包蔵地の認定には、考古学的調査成果に限らず歴史地理学的・自然地理学的資料等の諸要素を考慮する必要がある。

平成10年6月に報告された「埋蔵文化財の把握から開発事業の発掘調査に至るまでの取り扱いについて」の中で法律上の保護対象となる「周知の埋蔵文化財包蔵地」は試掘・確認調査その他の発掘調査等の成果に基づき高い精度で把握・決定されることが必要であるとされており、その方法として、遺物の散布状況や地形の観察、地形・地質の形成過程を踏まえ、各時代の生活・生業に適した立地の想定、地形図・空中写真・地籍図・絵図等の資料等の総合的な活用が挙げられている。

実際に岐阜県大垣市教育委員会では、平成元年から平成8年度までに実施された分布調査において、踏査を主とする考古学的調査だけでなく、「時代ごとの地形復元図を作成する自然地理学的調査、絵図や地籍図（字絵図）から地表面下の痕跡を推定する歴史地理学的調査、そして低地での発掘ではまず最初に出会う掘潰れ等の輪中景観を復元する人文地理学的調査」といった地理学的手法を援用し、遺跡推定の検討材料としている[1]。市域の大半が扇状地であり、「沖積地での踏査の困難さ」を指摘される点など、当市と非常に素地は似ている。大垣市教育委員会の分布調査手法は理想形とも言うべき取り組み方であるが、諸般の事情から当市で同じ手法を採用することは難しい。少しでも理想に近づけるため、当市では以下の手法を採り、埋没遺跡の範囲決定の手がかりとした。

1）考古学的調査（踏査）

2）歴史地理学的調査（旧字界・字名図作成）

3）自然地理学的調査（従前図判読、地形分類調査）

考古学的調査の方法は、先述のとおりである。旧字名・字界図は、主に砺波郷土資料館蔵の字絵図や『砺波市史 資料編5集落』[2]から字名・字界を抽出し、旧地形図（昭和30年代砺波市作図）・現況地形図（平成5年砺波市作図）に情報を入力、必要に応じ識者から聞き取り調査を行った。

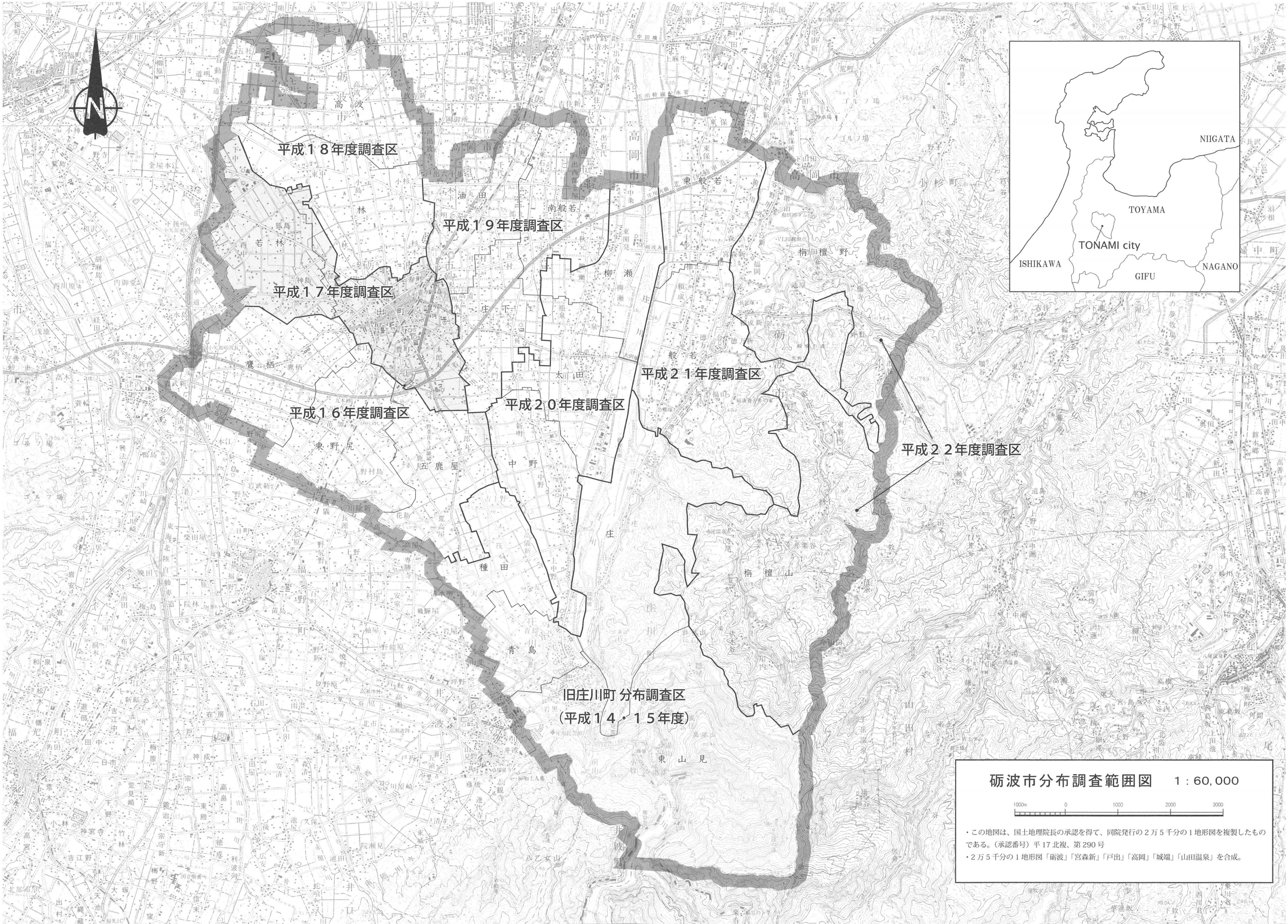
また、自然地理学的調査では、土地改良区に保管されている圃場整備前の従前図を収集し、失われた地形状況の復元を試みた。現況での地形確認が難しいため、旧地形を把握するには従前図を活用することが有効である。圃場整備前の空中写真から旧地形図・等高線図を作成することは技術的に可能であるが、費用的問題から断念した。従前図は、公図を基に作られているものや現地測量が行われているものなど精度にばらつきはあるが、基本的に縮尺が1/500もしくは1/1000であるため、空中写真よりはるかに現況図面との整合が容易である。ただし、圃場整備が行われた全地区に従前図が作成・保管されていない難点もある。

地形分類調査は、『土地分類基本調査　城端』（富山県 1981）をはじめとする地形分類図・表層地質図に拠っている。また、マッドと呼ばれる黒土層について、外山秀一氏の論文「プラント・オパールからみた砺波平野の土地利用と黒土層の特性」[3]を参考としている。

1　岐阜県大垣市教育委員会文化部　1997　『大垣市遺跡詳細分布調査報告書 - 解説編 -』

2　砺波市史編纂委員会　1996　『砺波市史 資料編5集落』

3　外山秀一 1997「プラント・オパールからみた砺波平野の土地利用と黒土層の特性」『砺波散村地域研究所研究紀要第13号』砺波市立砺波散村地域研究所


平成１８年度調査区
平成１９年度調査区
平成１７年度調査区
平成２１年度調査区
平成２０年度調査区
平成１６年度調査区
平成２２年度調査区
旧庄川町 分布調査区
（平成１４・１５年度）
NIIGATA
TOYAMA
TONAMI city
ISHIKAWA
GIFU
NAGANO
砺波市分布調査範囲図　１：60,000
1000m　0　1000　2000　3000
・この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の２万５千分の１地形図を複製したものである。（承認番号）平 17 北複、第 290 号
・２万５千分の１地形図「砺波」「宮森新」「戸出」「高岡」「城端」「山田温泉」を合成。

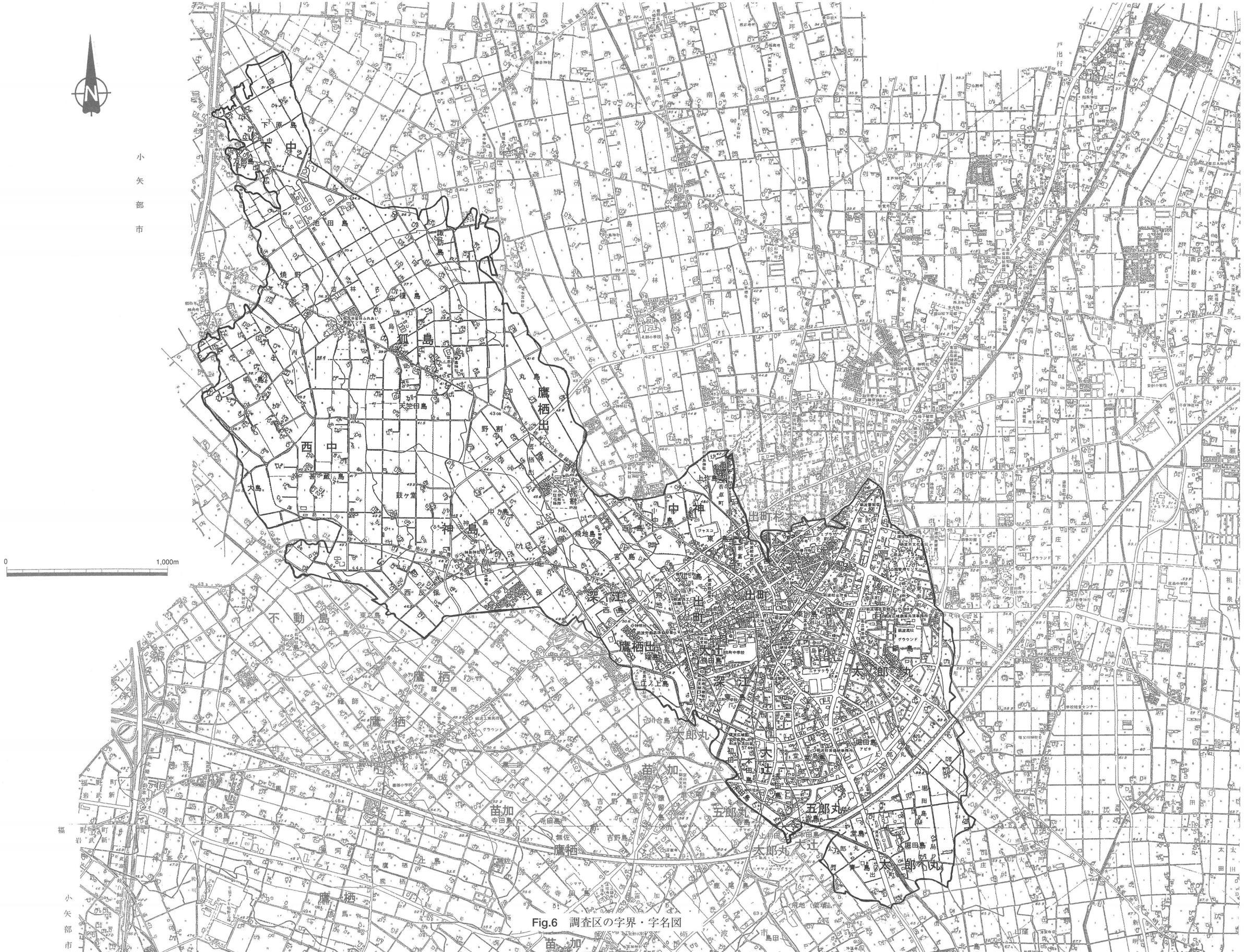


Fig.6　調査区の字界・字名図

第２章　調査の成果

１　平成１７年度調査区の概要

出　　町　出町、杉木、太郎丸、神島、深江、中神、大辻、鷹栖出から成る。

庄川扇状地の扇央部に位置し、市の中心市街地にあたる。昭和30年代までは行政機能の中心地として栄えた。砺波駅前は藩政時代、砺波御郡所や十村相談所があり、近世には杉木新町と呼ばれた。昭和45年に出町南部地区、昭和48年に出町北部地区の圃場整備が施工され、近年では、太郎丸、杉木で大規模な区画整理が実施されている。

太郎丸は中世地名であり、室町時代初期の永享元年（1429）、越前国堺の郷から新田与兵衛という武士が砺波郡庄下郷に来住し、その家臣・堀田市郎兵衛が拓いた地を堀田島という。また、鍋島仁兵衛、鍋島五右衛門が拓いた地を鍋島といい、永正３年（1506）に簗川島の八幡宮を祀った伝承がある。

神島の圓光寺の由緒によると、先祖は越後国蒲原郡藤田之荘を領していた藤田播磨守貞信で、南北朝期に来住したという。一向一揆の頃、後裔の藤田太郎貞明は石山合戦に参加、帰郷後、寺を開き、傍ら農を営んだという。また、神職河合氏は明治の復職以前はこの地方には数少ない本山派の修験で、由緒によると南北朝の頃京都から来住したとされる。

深江、中神、大辻、鷹栖出には、近代より古い文献・伝承等の記録類は残っていない。

また、出町地区において埋蔵文化財の発見は、これまでに記録がない。

若　　林　狐島、西中、下中から成る。

出町の北西に位置する散村地帯であり、出町の市街地から延びる県道砺波・小矢部線が縦断する。昭和39年に若林東部地区、昭和45年に若林西部地区の圃場整備が施工されている。

狐島の中心部に憶念寺があり、寺伝には「祖先ハ南朝ノ武臣ナリシモ、正統南朝ノ勢力ハ微々トシテ振ハズ、北朝威ヲ壇ニスルヲ見ルニ忍ビズ、遂ニ応安年中京畿ノ地ヲ去リ従僕ト共ニ遠ク深草ノ此地ニ来リ、野原庄左衛門ト名ノリ土地ヲ開拓セリ、之レ此ノ村ノ開祖ニシテ我ガ家ノ先祖ナリ」とある。また、貞享元年（1684）金屋本江村金右衛門の書上に「先年は野毛にて御座候所に、狐屋敷と申す所御座候。それをかたどり狐島村と申す由承伝申候」とある。

南朝の延元２年（1337）、新田義貞が北国経営にあたり、越中の住人黒田甚兵衛景正が勤王の志厚く、越前の金ヶ崎城に馳せ参じたが、武運拙く義貞が戦死すると、甚兵衛は西中の地に土着し農業に従事するに至ったのが村の開祖との伝承がある。

「中村埜神社縁起」によれば、住古赤丸城主浅井左衛門助成の家臣中村久助なる者、神の託宣により下中の地に神社を勧請し、神社守護の傍らこの地一帯の原野を開拓し後に中村郷と称した。近世には下中村・上中村・東中村・西中村の四ヶ所に分村したのが起こりという。津川左次平家墓副碑によると、先祖左次平は越後の津川郷より出で長尾為景の軍勢に従い越中各地転戦後、この下中の地に居を定め八幡宮を建立守護神として祀り、この地一帯の原野を開発し、代々営農に努め豪農として知られるまでになったとのことである。

また、若林地区において埋蔵文化財の発見は、これまでに記録がない。

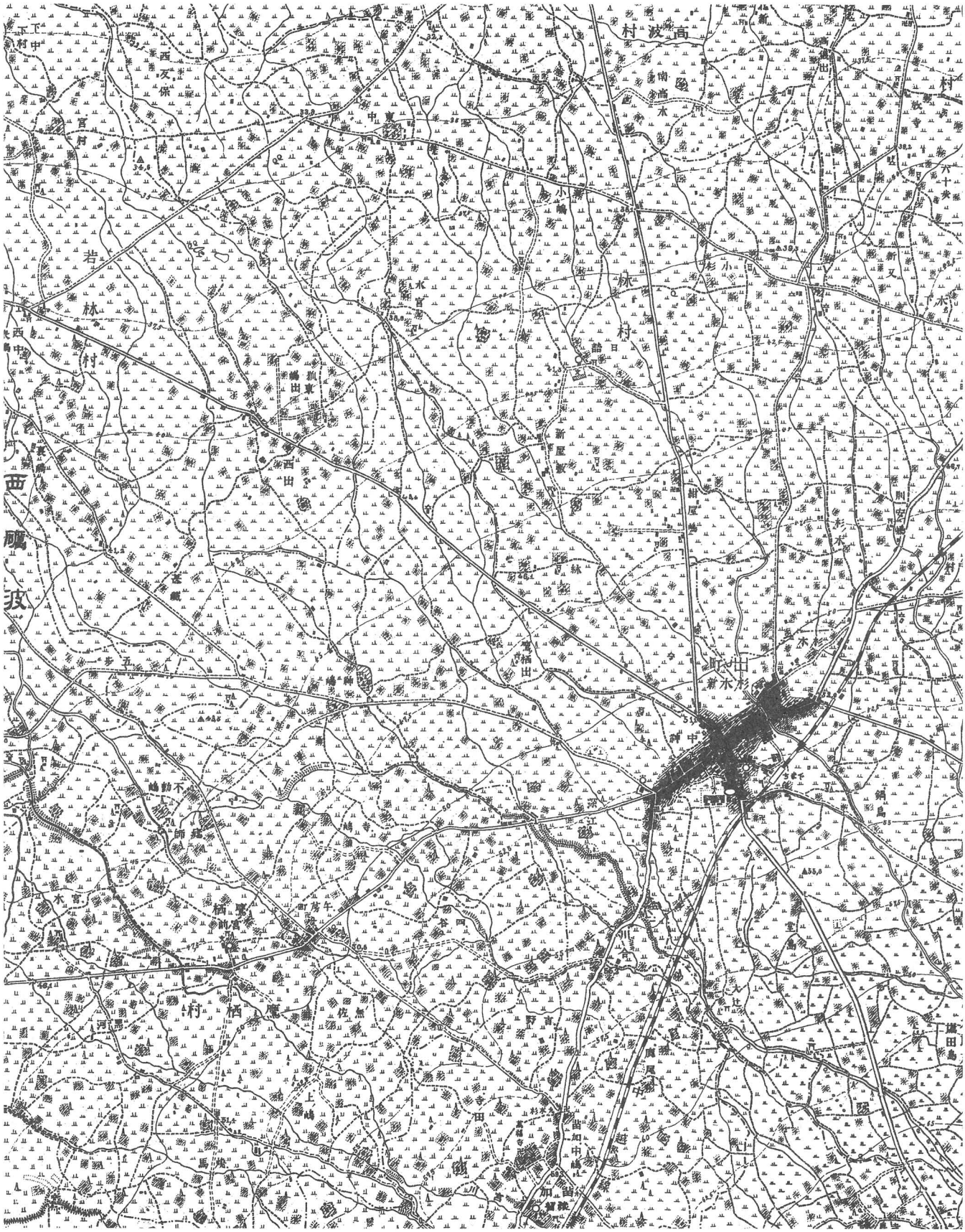


Fig.7　調査区周辺の旧版地図

この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の２万分の１旧版地図を複製したものである。(承認番号) 平 16 北複、第 101 号

Fig.8　従前平面図（出町）と遺跡の位置

・この図は砺波土地改良区の許可を得て複製トレースしたものである。

Fig.9　従前平面図（若林）と遺跡の位置

・この図は砺波土地改良区の許可を得て複製トレースしたものである。

2　採集遺物

遺物構成　採集遺物の時期別点数は、弥生1点、古代9点、中世4点、近世84点、近代・時期不明52点、合計150点である。種類は、弥生土器、須恵器、土師器、珠洲、越中瀬戸、肥前陶磁器、信楽等で構成される。近世・近代の遺物が全体の約90%を占める。

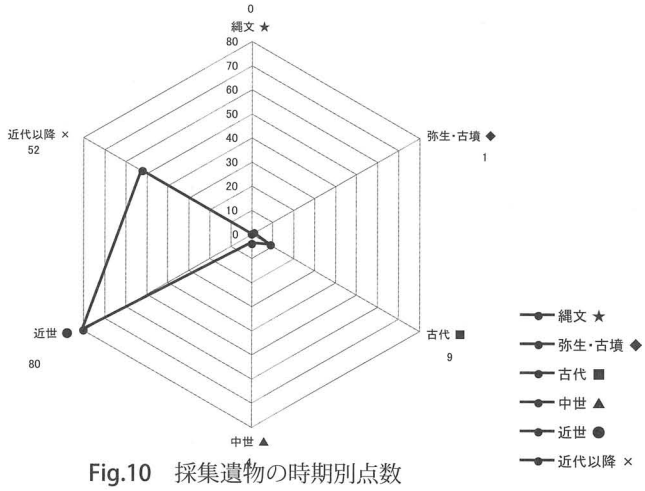


Fig.10　採集遺物の時期別点数

分布状況　出町地区は市街地化が進んでいるため、踏査対象となる田畑も少なく、面積に比して遺物の採集は少量である。杉木地内で大規模な土地区画整理が進められており、事業地内で古代遺物を1点採集したが扇状地形成の砂礫層まで掘削工事が及んでいることから、原位置を保っているとは考え難い。

太郎丸地内で表採した弥生土器（145）は、縄文晩期後葉の土器型式の影響を色濃く残すもので、前期の柴山出村式に相当する。外面に草茎類による粗い条痕文が施され、内面にはナデによる調整がみられる。外面に煤が付着していることから、器形は甕と思われる。市内では、弥生前期から中期の遺物はこれまでに未発見のため注目される資料である。

河道や微高地と微高地に挟まれた低地には遺物の分布は非常に少なく、現在の集落周辺部に近世・近代遺物が散布している傾向が認められる。神島集落、狐島集落は宅地を取り囲むように遺物が散布している。西中集落、下中集落には古代・中世を含む遺物が比較的多く分布しており、西の小矢部市域への広がりを推定できる。また、地元の方の話によれば、以前に西中の南端にある神明社付近から五輪塔が掘り出されたという。永福町の砺波労働基準監督署の北側にある墓地で五輪塔の空輪が安置されていた。

遺物解説　ほとんどが小破片であり、図化しうるものはわずかである。1は珠洲の壺もしくは甕の胴部片であり、外面に平行叩き目が施される。34は、近世陶器の鉢であり、外面全体と口縁部内面に緑色釉を施す。48は中世土師器に似た近世陶器であり、良好に焼き締まっており、口縁部に灯火の煤が付着している。54は越中瀬戸の皿であり、外面に轆轤撫での調整痕が残る。79は17世紀代と考えられる肥前陶器の皿であり、緑色釉がかかる。97は越中瀬戸の碗で全体に錆釉がかかる。

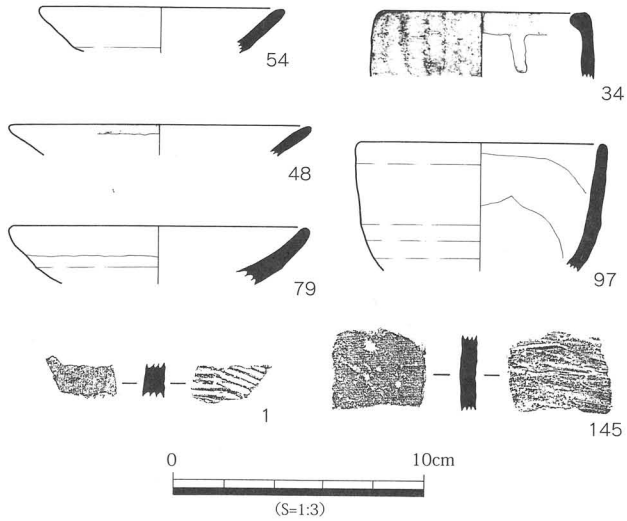


Fig.11　遺物実測図

Tab.4　採集遺物一覧

遺物番号	遺物情報	時期	マーク
1	珠洲	中世	▲
2	肥前陶器 ,18c	近世	●
3	磁器	不明	×
4	陶器	不明	×
5	土師器甕	古代	■
6	珠洲	中世	▲
7	越中瀬戸 ,17-18c	近世	●
8	肥前陶器 , すり鉢	近世	●
9	越中瀬戸	近世	●
10	肥前陶器	近世	●
11	肥前陶器	近世	●
12	須恵器	古代	■
13	磁器	不明	×
14	越中瀬戸 , 碗	近世	●
15	陶器	不明	×
16	磁器	不明	×
17	土師器質土器	近世	●
18	陶器 ,19c	不明	×
19	陶器	近世	●
20	肥前陶器	近世	●
21	肥前陶器	近世	●
22	土師器甕	古代	■
23	近世陶器	近世	●
24	近世陶器	近世	●
25	越中瀬戸皿	近世	●
26	須恵器	古代	■
27	越中瀬戸皿	近世	●
28	近世陶器	近世	●
29	陶器	不明	×
30	陶器	不明	×
31	陶器	不明	×
32	肥前陶器	近世	●
33	越中瀬戸	近世	●
34	近世陶器	近世	●
35	近世陶器	近世	●
36	肥前陶器	近世	●
37	瓦質土器	近世	●
38	肥前磁器	近世	●
39	陶器	不明	×
40	肥前磁器	近世	●
41	関西系陶器	近世	●
42	越中瀬戸 , 碗	近世	●
43	肥前陶器	近世	●
44	越中瀬戸	近世	●
45	近世陶器	近世	●
46	肥前磁器	近世	●
47	肥前陶器 , すり鉢	近世	●
48	近世陶器	近世	●
49	陶器	不明	×
50	磁器	不明	×
51	肥前陶器 ,18c	近世	●
52	越中瀬戸	近世	●
53	近世陶器	近世	●
54	越中瀬戸	近世	●
55	越中瀬戸	近世	●
56	越中瀬戸	近世	●
57	肥前陶器	近世	●
58	陶器	不明	×
59	磁器	不明	×
60	近世陶器	近世	●
61	近世陶器	近世	●
62	近世陶器	近世	●
63	土師器	古代	■
64	陶器	近世	●
65	陶器	不明	×
66	陶器	不明	×
67	越中瀬戸	近世	●
68	陶器	不明	×
69	土管	不明	×
70	越中瀬戸	近世	●
71	肥前磁器 ,18c	近世	●
72	肥前磁器 ,18c	近世	●
73	須恵器	古代	■
74	肥前磁器	近世	●
75	肥前磁器	近世	●
76	陶器	近世	×
77	陶器	不明	×
78	陶器	近世	×
79	肥前陶器 ,17c	近世	●
80	陶器	不明	×
81	陶器	近世	●
82	陶器	不明	×
83	磁器 ,19c	不明	×
84	肥前磁器 ,18c	近世	●
85	近世陶器	近世	●
86	肥前磁器 ,19c	近代	×
87	肥前磁器	近世	●
88	磁器	不明	×
89	肥前陶器 ,18c	近世	●
90	肥前磁器 ,18-19c	近世	●
91	肥前陶器 ,18c	近世	●
92	陶器	不明	×
93	肥前陶器	近世	●
94	陶器	不明	×
95	磁器	不明	×
96	磁器	不明	×
97	越中瀬戸	近世	●
98	肥前陶器	近世	●
99	肥前系陶器	近世	●
100	肥前陶器	近世	●
101	陶器	不明	×
102	磁器	不明	×
103	越中瀬戸	近世	●
104	陶器	不明	×
105	越中瀬戸	近世	●
106	越中瀬戸	近世	●
107	須恵器	古代	■
108	陶器	不明	×
109	陶器	不明	×
110	陶器	不明	×
111	珠洲 , 壷 ,14-15c	中世	▲
112	肥前磁器 ,18c	近世	●
113	須恵器	古代	■
114	陶器 ,18c	近世	●
115	磁器	不明	×
116	肥前陶器 ,18c	近世	●
117	磁器	不明	×
118	陶器	不明	×
119	陶器	近世	●
120	陶器	不明	×
121	陶器	不明	×
122	近世陶器	近世	●
123	陶器	不明	×
124	陶器	不明	×
125	陶器	不明	×
126	磁器 , 紅皿	不明	×
127	近世陶器	近世	●
128	肥前陶器 ,18c	近世	●
129	陶器	不明	×
130	越中瀬戸	近世	●
131	越中瀬戸	近世	●
132	磁器	不明	×
133	磁器	不明	×
134	陶器	不明	×
135	近世磁器	近世	●
136	近世磁器	近世	●
137	近世磁器	近世	●
138	近世陶器	近世	●
139	珠洲	中世	▲
140	陶器	近世	●
141	磁器	不明	×
142	越中瀬戸 + 磁器	近世	●
143	土師器	古代	■
144	磁器	不明	×
145	弥生土器	弥生	◆
146	越中瀬戸	近世	●
147	肥前陶器	近世	●
148	磁器	不明	×
149	信楽	近世	●
150	近世陶器	近世	●

3　遺跡各説

遺跡名	神島遺跡（かみしま）　〔新規〕	遺跡番号	―	地図	NJ531211
所在地	砺波市神島	現況	水田・宅地		
種別	散布地	時代	近世		
遺物番号	119，122				
包蔵地認定	神島神社や圓光寺を中心とする集落は、東西に長いマッドに包括されている。遺物は近世期しか採集していないが、圓光寺由緒に南北朝期に越後国蒲原郡藤田之荘領主の藤田播磨守貞信が来住した記録があることや近くの神明社から五輪塔が出土したという伝聞を参考とした。庄川扇状地上において奈良・平安期の遺跡がマッド上の微高地に存在する事例が多いことを考慮し、従前図等から見て地形的に高い部分から傾斜変換する範囲を包蔵地として認定した。				
調査歴	なし				
文献	なし				

遺跡名	狐島遺跡（きつねじま）　〔新規〕	遺跡番号	―	地図	NJ531211
所在地	砺波市狐島	現況	水田・宅地		
種別	散布地	時代	近世		
遺物番号	89，90，91				
包蔵地認定	狐島の集落は、県道砺波・小矢部線を挟んで南北に延びる正円形状を呈するマッド上に存在している。遺物は近世期しか採集していないが、憶念寺寺伝には開祖が南北朝期の武士という由来があることや集落が砂礫地質に囲まれた中州状地形に存在すること、または庄川扇状地上において奈良・平安期の遺跡がマッド上の微高地に存在する事例が多いことを考慮し、従前図等から見て地形的に高い部分から傾斜変換する範囲を包蔵地として認定した。				
調査歴	なし				

遺跡名	西中遺跡（にしなか）　〔新規〕	遺跡番号	―	地図	NJ531211
所在地	砺波市西中	現況	水田・宅地		
種別	散布地	時代	古代・近世		
遺物番号	46，47，66，73				
包蔵地認定	西中地区には北西方向に長細いマッドが存在しており、その南半部で須恵器片と近世遺物を採集している。数少ない遺物で包蔵地として認定するのは困難であるが、庄川扇状地上において奈良・平安期の遺跡がマッド上の微高地に存在する事例が多いことを考慮し、従前図等から見て地形的に高い部分から傾斜変換する範囲を包蔵地として認定した。				
調査歴	なし				
文献	なし				

遺跡名	西中中島遺跡（にしなかなかじま）　〔新規〕	遺跡番号	―	地図	NJ531211

所在地	砺波市西中	現況	水田・宅地
種別	散布地	時代	古代・近世

遺物番号　38，39，40，50，51，54，57，58

包蔵地認定　西中地区には北西方向に長細いマッドが存在しており、その北半部に古代・近世の遺物を集中的に採集している。今年度調査でもっとも遺物が濃密に分布しているところである。遺物の広がりは、北西方向に向かって小矢部市域に延びていくものと思われる。本遺跡の東側、砂礫層にあたる場所で古代に属する土師器片（63）を採集している。胎土に白色砂粒を含む小片で、内外面に横方向の撫で調整が見られ、内面に煤が付着しているため、甕の頸部部分と考えられる。地質状況から遺物採集地点に古代遺跡が存在する可能性は認められず、本遺跡から何らかの作用で移動したものと考えられる。庄川扇状地上において古代遺跡がマッドの存在する微高地に発見されていることからも、地形的に高い部分から傾斜変換する範囲を包蔵地として認定した。

調査歴　なし

文献　なし

遺跡名	下中万部島遺跡（しもなかまんぶじま）　〔新規〕	遺跡番号	―	地図	NJ531211

所在地	砺波市下中	現況	水田・宅地
種別	散布地	時代	古代・中世・近世

遺物番号　1，2，3，4，5，6

包蔵地認定　西中地区には北西方向に長細いマッドが存在しており、その北半部に古代・近世の遺物を集中的に採集している。従前図で旧地形を確認したところ、万部島を中心に円形の地形的高まりが認められ、その高まりを避けるように幾筋の小河道が蛇行している。その高まりは、やや規模が小さいので、圃場整備前の扇状地上で見られた島状地形の可能性が高い。また、珠洲片を２点採集している。いずれも甕もしくは壺の胴部片であり、年代を特定することは難しい。比較的狭い範囲で採集されていることから、古代から続く中世集落が存在する可能性も考えられる。以上のことから、従前図から判断される地形的高まりを中心とした不正円形の範囲を包蔵地として認定した。

調査歴　なし

文献　なし

第３章　まとめ

調査所見　今年度の調査対象地は、周知の埋蔵文化財包蔵地がこれまで１遺跡も登録されておらず、また考古資料発見の記録等も皆無という”埋蔵文化財不毛の地域”だったので、「新規発見ゼロ」の可能性も視野に入れ踏査に臨んだ。意に反して、太郎丸地内で弥生時代前期の土器片を採集したり、西中・下中といった小矢部市との境付近では古代・中世をはじめ多くの遺物が分布する状況を掴むことができた。

また、地質調査を進める内に調査対象地内にマッドと呼ばれる黒色土堆積地帯が放射状に点在することが判明した。ほとんどのマッドに現在の集落が立地しており、洪水に備え人々が安定的な地形を選択した結果と見ることもできる。

字界・字名調査では、「○○島」という小字地名が多く見られることを確認している。出町地区では、堀田島、鍋島、堂島、長田島、本田島、東島、飛田島、簗川島、川合島、江ノ上島、端島、西島、仏島、東島、上作島、中島、宮島、丸島、諏訪島、若林地区では、天竺田島、榎島、池田島、甚蔵島、大島、中島、下原島、万部島といったように小字の大半に「島」が付く。中世に来住した武士名に由来する小字もあるが、扇状地に点在するマッドや微高地といった地形状況を示す可能性も考えられる。

出　　町　太郎丸地内で採集した弥生土器は、市内では未発見の前期に属するものである。土器１点の分布をもって包蔵地として認定するには、地形状況・歴史地理学的要素を考慮しても困難であったため、あえて包蔵地としなかった。今後、周辺における開発の際には注意したい。

出町地区は市街地化しており遺物を採集することができなかったが、地形的にみてマッドがいくつか存在しているので、包蔵地が眠っている可能性は充分に考えられるが、今回の調査手法では認識することができなかった。

若　　林　新規遺跡を５箇所確認できた。神島遺跡、狐島遺跡は時代区分を近世としたが、周辺の状況から古代に属する可能性もある。西中遺跡、下中万部島遺跡では古代、中世、近世の遺物を採集することができ、小矢部市域への遺跡の広がりを推定することができる。

小矢部川右岸から庄川扇状地扇央部にかけて遺跡が希薄であることから、これらの新規遺跡発見の意義は大きい。今後の発掘調査によって、各遺跡の詳細が明らかになることを期するものである。

Tab.5　調査遺跡一覧

	遺跡番号	遺　跡　名	所　在　地	時　代	摘　要
1	—	神島遺跡	砺波市神島	近世	新規
2	—	狐島遺跡	砺波市狐島	近世	新規
3	—	西中遺跡	砺波市西中	古代・近世	新規
4	—	西中中島遺跡	砺波市西中	古代・近世	新規
5	—	下中万部島遺跡	砺波市下中	古代・中世・近世	新規

※新規５遺跡

参考文献

有薗正一郎他編　2001『歴史地理調査ハンドブック』古今書院

犬伏和之・安西徹郎編　2001『土壌学概論』朝倉書店

大垣市教育委員会文化部　1997『大垣市遺跡詳細分布調査報告書　解説編』

神島利夫　1982「地形地質」『地下水利用等基礎調査報告書』富山県

鈴木隆介　1998『建設技術者のための地形図読図入門　第2巻　低地』古今書院

高橋　学　2003『平野の環境考古学』古今書院

竹村利夫　1978「砺波平野南部地域の段丘地形」『地理学評論』vol.51-9

地学団体研究会編　1994『新版地学教育講座9 地表環境の地学－地形と土壌－』東海大学出版会

砺波市・砺波市土地改良協会　1985『砺波市ほ場整備完成記念誌』

砺波市史編纂委員会　1990『砺波市史資料編1　考古　古代・中世』

1996『砺波市史資料編5　集落』

富山県農地林務部ほ場整備課　1981『土地分類基本調査　城端』

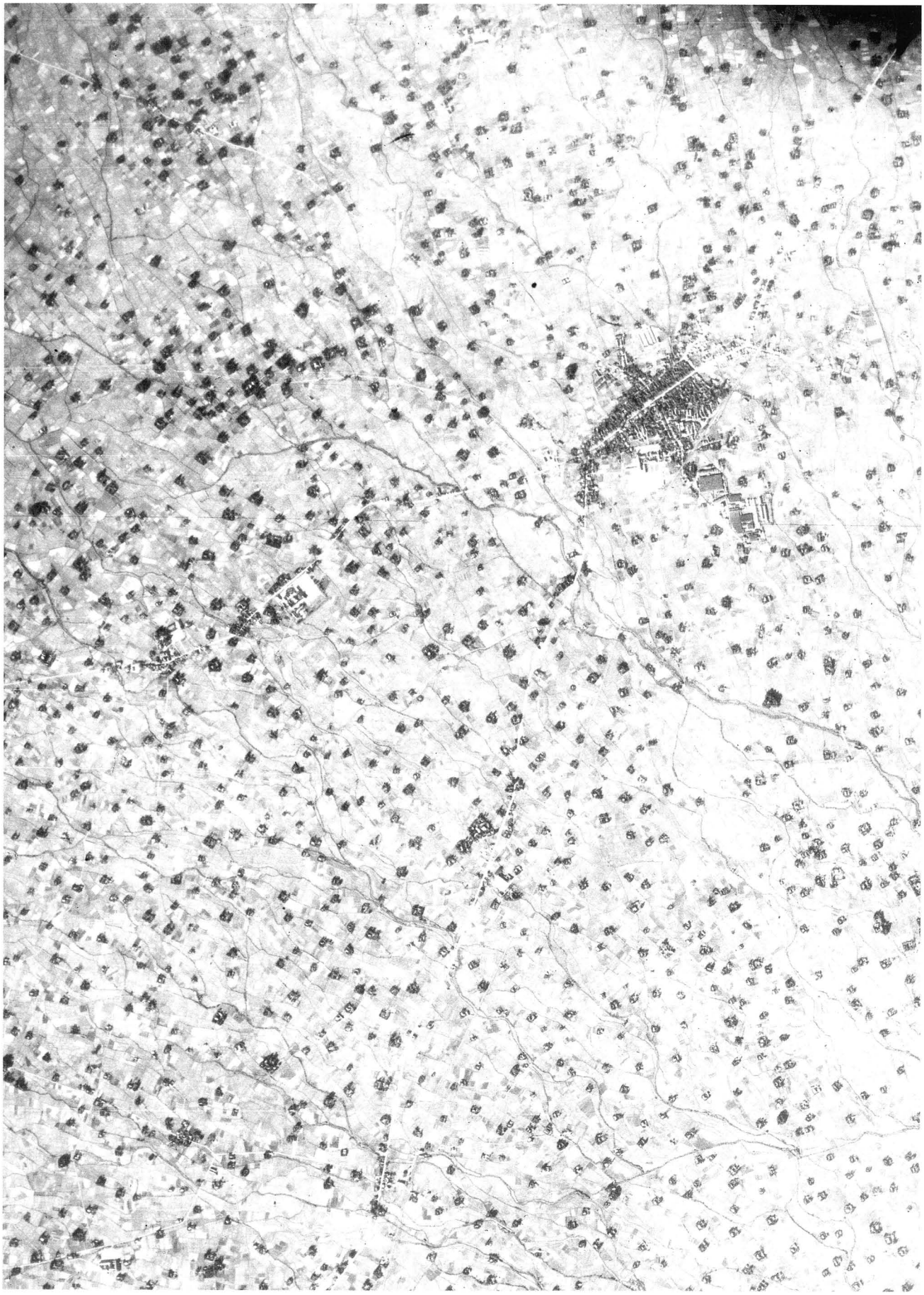
1970『土地分類基本調査　石動』

外山秀一　1997「プラント・オパールからみた砺波平野の土地利用と黒土層の特性」『砺波散村地域研究所研究紀要第13号』砺波市立砺波散村地域研究所

久間一剛他編　1993『土壌の事典』朝倉書店

深井三郎　1976『富山の地形と地質』富山県自然保護課

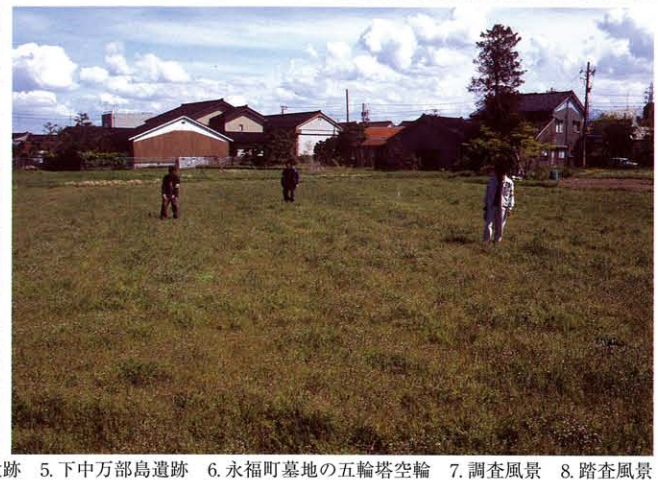
PL.1　空中写真（1）



この写真は、国土地理院長の承認を得て、同院撮影の空中写真を複製したものである。（承認番号）平 17 北複、第 290 号

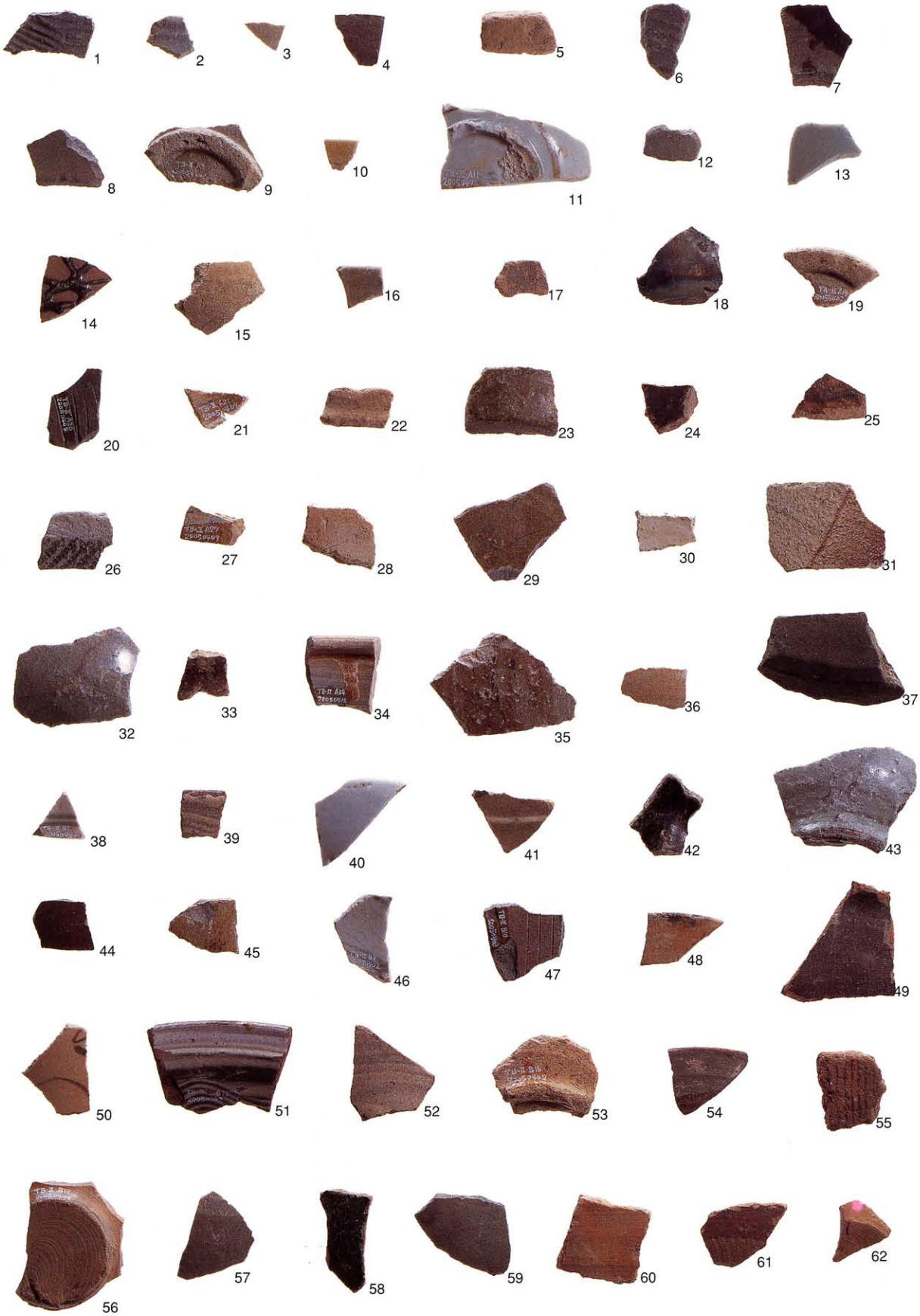
PL.2　空中写真（2）

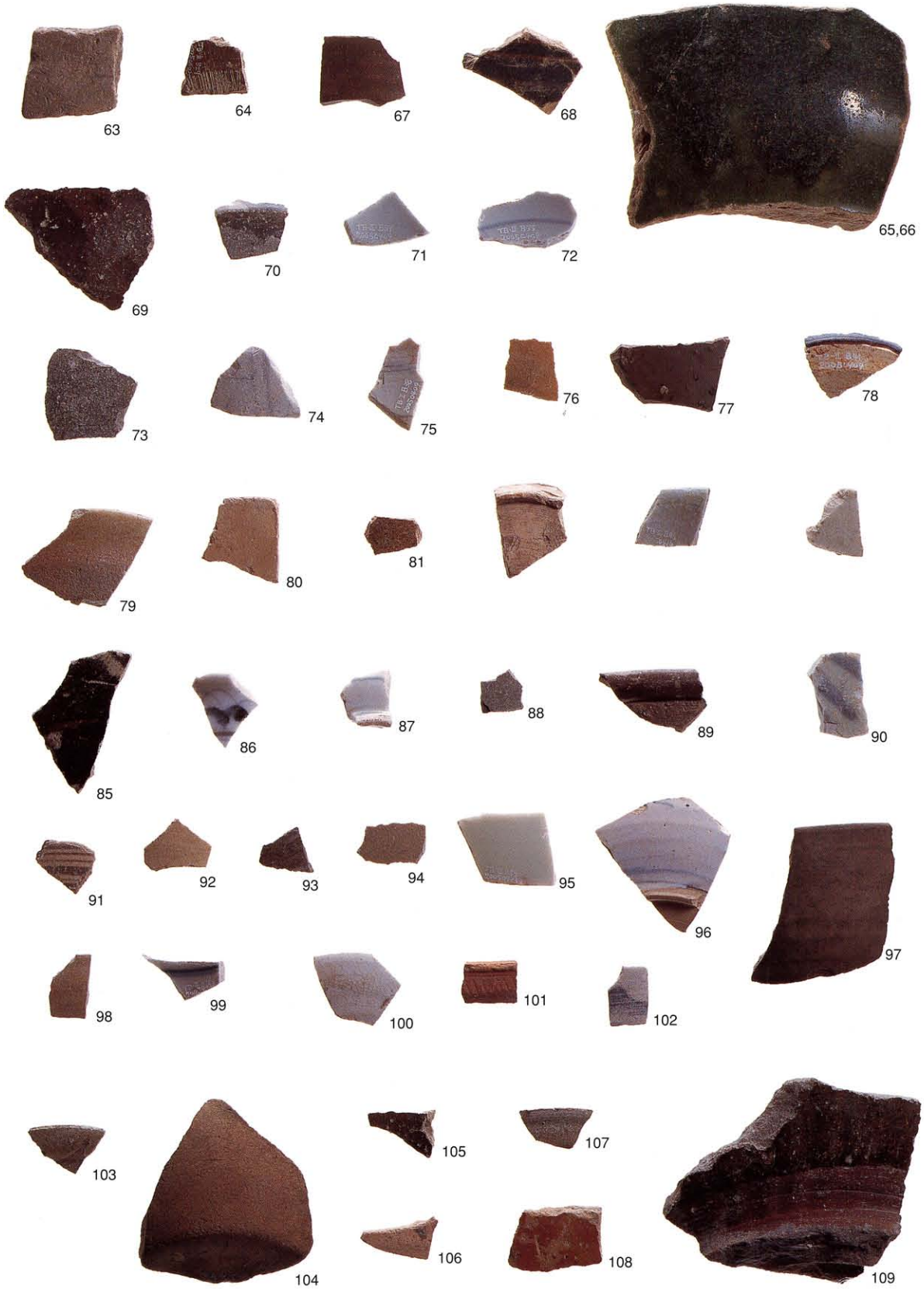
この写真は、国土地理院長の承認を得て、同院撮影の空中写真を複製したものである。（承認番号）平 17 北複、第 290 号



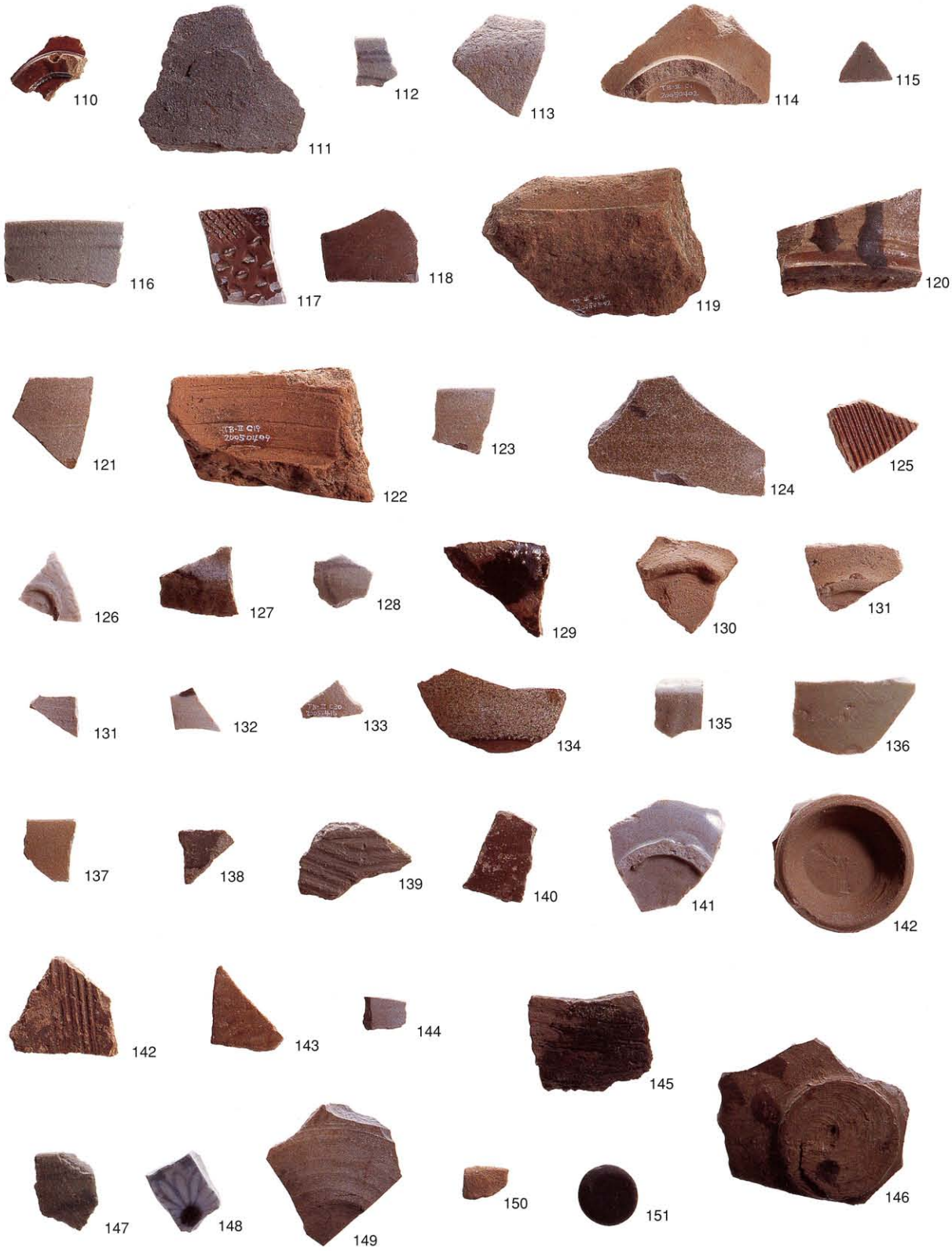
1. 神島遺跡　2. 狐島遺跡　3. 西中遺跡　4. 西中中島遺跡　5. 下中万部島遺跡　6. 永福町墓地の五輪塔空輪　7. 調査風景　8. 踏査風景

PL.4 採集遺物（1）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62


63
64
67
68
65,66
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109

PL.6 採集遺物（3）


110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151

報告書抄録

ふりがな	となみしいせきしょうさいぶんぷちょうさほうこく に
書名	砺波市遺跡詳細分布調査報告２
副題	出町・若林
編著者名	野原大輔（砺波市教育委員会 生涯学習課）
編集・発行機関	砺波市教育委員会
所在地	〒932-0393　富山県砺波市庄川町青島401番地　TEL0763-82-1904
発行年月日	平成18年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査原因
しないいせき	とやまけんとなみしでまち・わかばやし	162086	—	36度39分5秒	137度2分52秒	市内遺跡詳細分布調査事業
市内遺跡	富山県砺波市出町・杉木・太郎丸・神島・深江・中神・大辻・鷹栖出・狐島・西中・下中			調査面積 —	調査期間 2004.4.13～2005.3.27	

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
市内遺跡	—	—	—	—	
神島遺跡	散布地	近世	—	近世陶器	
狐島遺跡	散布地	近世	—	肥前陶器	
西中遺跡	散布地	古代・近世	—	須恵器、肥前陶磁器	
西中中島遺跡	散布地	近世	—	越中瀬戸、肥前陶磁器	
下中万部島遺跡	散布地	古代・中世・近世	—	土師器、珠洲、越中瀬戸、肥前陶器	

DISTRIBUTION SURVEY REPORT OF THE TONAMI CITY Vol.2

— DEMACHI・WAKABAYASHI —

Copyright © Tonami Prefectural Board of Education

401 Aoshima Shogawamati Tonami-City Toyama 932-0392,Japan

No parts of this publication may be reproduced or copied by any means
without prior permission of the copyright owner.

砺波市遺跡詳細分布調査報告 2

—出町・若林—

2006 年 3 月 31 日発行

編　集　砺波市教育委員会

〒 932-0393　富山県砺波市庄川町青島 401 番地
TEL（0763）82-1904　FAX（0763）82-3521

発　行　砺波市教育委員会

印　刷　有限会社明和印刷

〒 939-1507　富山県南砺市二日町 2196 番地
TEL（0763）22-4881　FAX（0763）22-4880

Printed in Japan